

● 天災は忘れた頃にやってくる

栄区地域振興課 平成2年入庁

中尾 宏司

災の限界と、災害から生還することの意味であった。

我々の防災に対する考え方は、過去最大級の災害と同規模の災害に対応するといったものである。それ以上の対応も可能であるが、日常生活が不便になるなどの弊害があり、その折衷案としての対応法だろう。つまり、これは必要最小限の防災ということができるかもしれない。ところが我々日本人は、地震などの自然災害が小被害で頻繁に起こるためか、災害に対して自信過剰若しくは鈍感なように思われ、今回の大震災ではその実態が浮き彫りにされたと思う。自治体や国の対応の不備に始まり、建築物の手抜き工事の発覚、避難所生活の混乱など、官民全般にわたって混乱している。これは、我々が自然災害に対してそれほど強くないことを示していると思う。この点が防災の限界であると思われるのである。

一方、災害で生還することについても思うことがあった。大地震の災害から無事脱出することとは、自分のためのみならず他の被災者のためでもある、ということだ。大地震直後は、道路

の崩壊などで消防などの救援があまり期待できず、まず自力による脱出を試みなければならぬ。そして、自力で脱出できた人が早期の救援活動の担い手となり得るわけだが、これがどれほど重要かを被災者の話から実感した。無論、最近の建造物は高機能・高層化が進んでいて、素人の救援活動には限界があると思うが、道路上のがれきを撤去して緊急自動車が進入しやすくするなど、作業はいくらでもある。災害からの生還は、二重の意味で大変重要な事であると痛感した。

今回の震災について思うのは、反省すべき人的問題点も数多くあるが、それにも増して、自然災害が人知を越えてすさまじいことを改めて知らされたことである。しかし、人知を越える事象だということを肝に銘じて普段から心掛け、災害が起こっても混乱せずに行動すれば、道が開けることも知った。そして、この自然に対する「恐れ」を忘れたとき、大災害が起こるような気がする。「天災は、忘れた頃にやってくる」、まさに至言である。

あとがき

「横浜市は、「ゆめはま2010プラン」で「世界に開かれた国際都市」を掲げ、積極的に外国人の暮らしやすい環境づくりを進めようとしている。

そのためには、外国人が日常生活でかかえる問題とその解決方策をさぐり、外国人に開かれた施策の充実をはかることが重要である。外国人に開かれた施策の充実とは、日本社会の外国人排除の意識・制度を再考することであり、横浜が文化的に豊かなことになることを再認識することである」

これは今回の調査季報の特集編集に当たった趣旨である。

しかし今回も、テーマを設定した編集部が教えていただいたことが多かった。その一つは、多くの方が、外国人を「隣人」として認識しているということである。異質な存在として見るのではなく、隣人として接しているのである。その隣人に問題が起これば一緒に考え、解決して

いこうという姿勢なのだ。

外国人住民をめぐるさまざまな問題は、日々新たな課題を提出してくれる。そして、少し目を開けば確実に私たちの身の回りに起こっていることが分かる。

今回の特集テーマは、「外国人に開かれた都市を目指して」であるが、一緒に暮らす「外国人に開かれていない都市」とは、つまり日本人にも開かれていない都市であることを意味している。外国人が抱えている問題は、私たちが住み暮らす社会が抱えている問題なのだ。

▲加藤▼

「調査季報」は職員が自由に意見を發表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にとまとめて企画局政策部調査課までお送りください。

FAX 六六三一四六一三
お問い合わせは、電話六七一一〇二一九

阪神・淡路大震災からは一年が過ぎた。私は横浜市の応援職員として、平成七年二月五日から一週間神戸市長田区役所に行ったが、その経験を元と感じたことをお話ししたい。

我々の仕事はテレビ等で大きく報道された、あの罹災証明書及び義援金関連事務であった。一緒に事務にあたった神戸市の職員や窓口に来た被災者から、震災当時の状況や震災後の経過など貴重な経験談を聞き、また区役所付近を見聞することができた。そこから感じたのは、防